

シンポジウム／「演じる戦争・観る聴く戦争」

## パフォーマンスとしての戦争展示 — 遊就館から考える —

丸山 泰明

いま手元に、大阪高島屋デパート発行の「東郷さん人形館」と題した八枚組の絵葉書がある。東郷さんとは、海軍軍人であり日露戦争の際に聯合艦隊司令長官を務めた東郷平八郎のことだ。記念スタンプには「昭和五年十月 大観艦式記念 国防大博覧会」とあるから、このイベントを記念して高島屋デパート内部に特設された人形館なのだろう。人形館では、薩英戦争に際して陣羽織の出で立ちで母に見送られて屋敷を出る若き日の東郷さんからはじまって、日露戦争の黄海海戦の際に取り乱している幕僚に対して東郷さんが一人沈着に例のコール・ツァイス製の双眼鏡を悠然と構えている場面、旅順陥落後に水師営司令部を訪ねた東郷さんが乃木希典を迎えられる場面といった名場面により一代記が物語られる。また東郷さんの肖像写真と自筆の書の絵葉書もある。これも展示されていたのであろう。書は「皇国興廃在此一戦各自一層奮闘努力矣」と記されており、これは有名なバルチック艦隊を撃滅する際に乙旗を掲げ士気を

鼓舞した言葉だ。「例の」「あの」「有名な」「名場面」という語彙をわざと使ってみたが、人形館で再現されている各場面は、今日においては必ずしも一般的ではないものの、戦前の日本社会においては基礎的な教養だったろう。人形館を見る人々の多くは、東郷平八郎の英雄物語をすでに知っていたと思われる。観覧者たちは、自分も知る東郷平八郎の物語と人形が演じる場面を照らし合わせながら見ていたに違いない。

このような戦争や軍事に関する展示についてのヴィジュアル資料として絵葉書を集めはじめてからしばらくたつ。戦後の感覚からすると、戦争や軍事が絵葉書の題材になっていていること自体に違和感を覚えるかもしれないが、展示に限ってみるだけでも相当数流通していた。ここでの「展示」とは、博物館展示もあるが、東郷さん人形館のような娯楽的な見世物も含んでいる。今回は靖国神社の附属施設である遊就館を取り上げ、そこで戦争がどのように演じられていたのかについて見ていくことにしたい。

ところで、博物館と見世物を同一の地平でとらえようとしているが、同じ展示という概念でくくられるとはいえず、両者の印象はずいぶん異なるかもしれない。博物館の側に、「学習」「真面目」「権威的」というイメージがあり、見世物の側には「娯楽」「いかがわしさ」「民衆的」というイメージがある。しかし、このような対比的なとらえ方自体を疑ってみる必要がある。実際のところ、坪内祐三や木下直之らによってもすでに論じられて

いるように、遊就館が所在する靖国神社は、近代日本における戦争についての国内最大の展示空間であったばかりでなく、明治期には競馬が催され今日も能楽堂や相撲場が存在する芸能やスポーツが興行される空間であった。<sup>1)</sup>春秋の例大祭や七月のみたま祭りでは今でも見世物が興行されている。このように靖国神社という場所は東京という都市におけるパフォーマンスの上演空間であったのであり、これらの出し物の一つとして遊就館の展示があったのである。

そしてまた戦争も見世物の題材であった。発表者も、戦争とはやや異なるが、八甲田山雪中行軍遭難事件という出来事の見世物化について調べたことがある。一九〇二年一月に、青森の歩兵第五聯隊の将兵二一〇人が雪中行軍を行い一九九人が死亡した。この出来事では、発生直後の二月から幻灯・生人形・ジオラマ・演劇・講談など、各種の見世物や演芸が興行されていた。その実態については、新聞や雑誌の記事からも追ったが、幻灯のスライドのように、当時の資料を自分で購入したものもある。このように集めてきた資料から、雪中行軍の出来事が上演され、人々は客として恐れつつ楽しみ、あるいはニュースとして接し、またあるいは観覧料の一部を義捐金として寄付していたことが浮かび上がってきた。これらの考察が契機となって、戦争と軍事の展示について視聴覚文化的な関心を拡大させていくことになったのである。

ここであらためて、戦争を演じる・観る・聴くという問題を

論じようとするとき、展示という場がいかなる論点を提供するのかについて考えてみることにしたい。展示とはモノが整然と並ぶ場であり、口承のいとなみからは遠いところに位置するようにも思われるからだ。

戦争をめぐる口承の営為において「物語」という言葉は、たとえば平家物語に代表されるように、戦死した者の崇りをなす霊魂としてのモノを、語ることによって鎮めるという意味合いを持つ。だが戦争の語りを誘発するのは、霊魂Ⅱモノだけではない、戦争によって生み出されたさまざまなモノもまた、語りを呼び起こすのである。そしてまた、モノそれ自体は基本的に言葉を発しないため、モノがなんらかの意味をおびるためには文脈化していく物語が必要となる。

さらに展示空間においては、個々の物語をもつモノは並べられ配置されることにより、より大きな物語の文脈に位置づけられ、戦争を演じ語りだすことになる。遊就館について言えば、その展示空間はモノを通じ、観覧者という「客」に対して日本の戦争とその歴史について上演するパフォーマンスの場なのである。<sup>2)</sup>そして人びとが観覧することによって戦争を語る声(再び)生み出されていく。声が生まれるのは展示空間という限定された場だけでは限らないだろう。観覧した帰りに先ほど見てきた展示物について語り合うこともありうる。絵葉書は、そんな戦争展示の観覧体験を他人に差し出し、あるいは記憶にとどめておこうとする記念物に他ならない。

さて、遊就館についてその歴史と展示内容の変遷についてごく簡単に説明しておくことにしたい。遊就館が開館したのは一八八二年のことである。関東大震災で建物が一度倒壊しているが、すぐに再建されている。一九三四年には、附属施設として現代兵器を展示する国防館が開館している。敗戦直後の一九四五年九月一日に閉鎖され、再開館するのは一九八五年のことである。戦後再開された後の展示では、靖国神社の祭神となつている戦没者の遺品が展示の中心となつているが、戦前はそうではなかつた。戦前における展示の中心は、むしろ原始時代から始まつて近世・近代までいたる武器についての軍事史だった。また、戦後の今日ではほとんど展示されていないが、近代以降の対外戦争における戦利品も重要な展示物だった。このように展示物は多岐にわたり歴史的に変化してきたが、ここではいくつかり上げて紹介することにしたい。

まず、死者の展示として代表的かつ象徴的な、乃木希典およびその妻静子そして勝典・保典の二人の子息の遺品の展示から始めることにしたい。乃木希典は陸軍軍人であり、日露戦争における第三軍の軍司令官として著名な人物である。特に二百三高地の激戦で有名な旅順の攻城戦とともに語られる。作戦を誤り多数の将兵を死に至らしめた「愚将」と評価されることもある。また旅順で二人の息子を失つた悲劇の将軍ともされる。明治天皇の死に際して妻とともに殉死したことでも有名である。乃木希典は、死後は軍神となり、全国各地のゆかりの地に乃木

神社も創建されたが、二人の子息とは異なり、靖国神社には祀られていない。遊就館には靖国神社の祭神以外の国家の功労者とされた軍人についても展示されていたのである。

乃木希典夫妻と子息の遺品一六点が遊就館に寄贈されたのは、一九一三年三月一日のことである<sup>(3)</sup>。明治天皇の大葬に際し乃木夫妻が殉死したのが一九一二年九月一三日なので、早くも死後半年ほどで移され、そして展示されたことになる。手元に乃木希典とその家族に関する遊就館の展示の絵葉書が十枚ある。発行元は遊就館であり、それぞれには「靖国神社 遊就館」という文字とともに桜の花と星と碇（それぞれ陸軍と海軍を表す）の図案があらわれた記念スタンプが押されている。絵葉書によると展示の構成は、乃木希典の肖像写真、星桜会総代の肩書での広瀬武夫の弔文をはじめとする遺墨、殉死した際に乃木夫妻が身に付けていた着衣およびその他の遺品、イギリス・ドイツなどから授与された勲章、刀や鎧・陣羽織・鞍・鎧などの近世の装身具、そして子息の乃木勝典・保典兄弟の軍装の肖像写真と保典による父宛の手紙、二人の兄弟が戦死時に装着していた軍服・軍刀などその遺品である。

戦前の軍人で、乃木希典ほどその人生と人格が数多く語られた人物はいないであろう。真鍋昌賢が論じているように、浪花節という口頭芸の主人公となった人物である。このような語り<sup>(4)</sup>は、当該の人物を偲ばせる具体的な事物が全くないところであるとされていたわけではなかつた。遺影や遺品・遺筆といった、死

者個人と関わりのあるモノが存在していたのである。逆にいえば、乃木希典とその家族に関するモノが遊就館に保存され展示しうるものとして一種の「聖性」を持ちえるのは、乃木希典が英雄として物語られるからこそなのである。モノと語りは、相互的な関係にあるのだ。

遊就館の展示は、屋内だけではなく、屋外にも広がっていた。次に紹介するのは「十五冊 加農砲三十七八年役旅順ニ於テ我砲火ニ遭ヒテ破壊セシモノ 戦利品」と題された絵葉書である。つまり、日露戦争の旅順攻城戦で砲撃により破壊され戦利品として持ち帰られたロシア軍の口径一五センチのカノン砲の展示である。このような戦利品も、遊就館の重要な展示物だった。対外戦争の際には例大祭に合わせて臨時に展示場が設けられることもあった。ふつう展示というと、平面の上にきちん置かれた姿を想像するが、このカノン砲はそうではない。荒々しく掘り返された地面になかば埋まり遺棄されるようにして設置されており、部品の一部はゆがんでいる。つまり戦場において破壊された時の光景が再現されている。戦闘と勝利の過去を物語るために日露戦争の一場面が上演されているのである。

展示されるのは過去の戦争だけではない。附属施設の国防館では現代および未来の戦争が展示されていた。しかもそこに参加体験型の展示が数多く取り入れられている。たとえば八七式重爆撃機の操縦席の展示では高度千メートルを飛行中であると設定され、前方の機関銃を発射し壁面に描かれた敵機を撃墜す

る感覚や地上に爆弾を投下する感覚を味わうことができた。もちろん、この展示は架空の戦争を扱ったゲーム機として存在したのではない。実際に同時代の日中戦争や太平洋戦争と隣り合わせに存在したものであったことを平和ボケしないように覚えておきたい。攻撃する側の展示だけではなく、都市防空のジオラマの展示もあった。また毒ガス攻撃も対しても、日本家屋やビルにおける毒ガス対策のジオラマや、防毒マスクを装着した人形が展示されていた。人形は、兵士はもちろんのこと軍馬や軍犬、そしてセーラー服の少女もいる。銃後もすなわち前線となる総力戦の姿が表されていたのである。

最後に、今回述べてきたことをあらためて整理することにした。遊就館の展示は、過去の戦争が上演される場であったとともに、戦争の際に演じなければならぬ国民の役割を啓蒙する場であったと言えるだろう。遺品を通じて可視化された軍人の姿は、あるべき国民の模範<sup>11</sup>規範だった。また、武器や戦利品を通じて過去の戦争は可視化され、破壊された戦利品の兵器によって戦場が再現された。上演された戦争は過去のものばかりではない。国防館では来たるべき現代戦が上演され、観覧者はそこで戦闘を疑似的に体験することすらできたのである。遊就館という展示空間において演じ観られる戦争とは、観覧者が一方的に鑑賞するだけのものではなく、観覧者が戦争の際にそのように演じることを求めるものであったのである。また、軍人の遺品や自国の兵器および戦利品による戦場の再現は、戦争

をめぐる語りに信憑性を与えるものであり、戦争をめぐる語りをうながし生み出すものでもあった。そして、これらのモノを収集・展示すべきものとして価値づけるのが国家の栄光を言祝ぐ戦勝の物語だったのである。

今回はモノを題材として論じたが、このような観点を戦争に関する土地（墓地・戦跡など）に拡張するならば、それらの空間が聖地化・観光地化していく、戦争をめぐるツーリズムと口承の関係性を問うことも射程に入ってくることになるだろう。この類の絵葉書も蒐集する必要があるのではないかと、このごろ思い始めている。

〔付記〕本稿は、第56回例会シンポジウム「演じる戦争・観る聴く戦争―口承文芸から戦争を考える―」における発表内容をもとに執筆したものである。発表の際に紹介しきれなかった論点や資料も若干加えている。シンポジウムは、あえて戦場のメタファーで表現するならば、物量に勝る大部隊の正攻法を論じる側（真鍋・丸山）と、ゲリラ戦を論じる側（野村）の共同戦線の間となった。対峙の間になったと言ってもいいかもしれない。シンポジウムの後、ためらい、言い淀みつつ、時に沈黙する個人の語りの意義と重要性をより際立たせるためにも、大部隊の正攻法的な戦争の語りⅡ展示についてさらに検討を深めていきたいとあらためて思った次第である。

注

(1) 坪内祐三『靖国』新潮社、一九九九年、木下直之『美術という見世物―油絵茶屋の時代』ちくま学芸文庫、一九九九年、同『世の途中から隠されていること―近代日本の記憶』晶文社、二〇〇二年

(2) 博物館展示をパフォーマンスと捉える観点は、すでに橋本裕之「物質文化の劇場―博物館におけるインタラクティブ・ミスコミュニケーション」(『民族学研究』第六二巻第四号、一九九八年)において示されている。ただし、橋本裕之が展示する側と展示を観る側のあいだの意味の(ミス)コミュニケーションに注目しているのに対して、本稿では展示が上演される文化的・社会的なコンテクストに注目している。

(3) 靖国神社附属遊就館編『遊就館史』遊就館、一九三八年  
(4) 真鍋昌賢「乃木さんのひとり歩き―浪花節にえがかれた日露戦後の庶民感情」『説話・伝承学』第六号、一九九八年

(まるやま・やすあき／国立歴史民俗博物館)